

Children's village

子ども村

for STAFF

・子ども村の目的

子どもたちが、自然の中での体験活動をとおして、
自然や環境への理解をふかめること、生きる力や友情をはぐくむこと、
自主性や積極性、協調性、忍耐力、社会性、自治力を育むこと、を目的とした長期のキャンプです。

・子ども村の特色と大切にしていること

子どもたちの主体的な取り組み・子どもたちがゆったりとした時間の中で、たっぷりと体験し、自分を解放し、仲間の中で育ちあっていく過程。

★子ども村の基本方針★

○子どもたちの自治の尊重

班での生活を基礎とした子どもたちの自治(こんだて、あそび、班運営)を尊重する。

○手づくりの生活に挑戦

子どもたちとの生活づくりは、衣・食・住とも、可能な限り「手づくり」にチャレンジする。

○体験プログラム

日々の体験活動は、子どもの班を単位に全員が行う。

○班での目標、全体での目標

班で一日ごとの適切な目標を持つ。また期間通しでの目標も持つ。(全体でも同様)

○「あにま」は、子どもたちの中に入る

あにまは、班に対してローテーションを組み、子どもの生活や活動を班の中に入って支援する。

○全体でのプログラムに挑戦

外部指導者を迎えての体験プログラム日程は、あらかじめ子どもたちに知らせ、全体プログラムとして挑戦する。

「あにま」 語源 anima : animation (子どもたちの)魂を活性化するもの という意味をこめています。

★あにまの役割

安全の管理者

～・プログラムの管理者

○ あにまは、安全の管理者として、子どもたちの『いのち』をあずかっています。

○ 子ども村でもっとも大切なことは、「安全と健康」です。子ども村が終わり、全員が無事に家庭へ帰ることが、子ども村成功の基本的条件です。

○ あにまは、活動中、どのような条件下でも、落ち着いた適切な判断と指示が出せることが必要です。危険を察知した場合の静止、中止の場合においては、あにまは絶対の権限をもちます。また、これは「子どもの自治」を越えるものです。

★あにまの心得

○わたしたちあにまは、どのような状況でも、勇気と決断をもって、子どもたちの生命を守ります。

○子どもたちへの押しつけをせず、子どもと一緒になんでも話しあい、正しく支援、援助します。

○あにまの好みや感情で行動しません。

○子ども村生活における約束やきまり、その他あやまった行動は、集団的に解決します。

○子どもたちに対しては、おおらかな愛情ときびしさと自信をもって接します。

○子ども村生活では、あにまが大いにやる気をだして、元気に活動することが、子どもたちを励まします。

★安全を保証するために★

① あにま体制

○班の中に3人以上の体制をつくる

○日常的な役割を分担する

○集中体制づくり(報告・連絡・相談):あにま一班の責任者一本部(リーダー)

② 集団をつくる

○あにまが集団として団結力を高める

○子どもたちの集団の自主的管理(一人ひとりの子どもが、自分自身の健康管理を考えること) ○子どもたちの集団の自治の力量(子どもたちが集団としてお互いに気をつけあい、助け合う) ○あにま集団と子ども集団との関係を高める(支援を受け入れる、求める度合い)

③ プログラムをつくる際に

○集団の力量を超えるものはないかを考える

○生活時間(活動時間)を崩してはいないかを考える

○子ども村全体の活動とのつながりを考え、余裕のあるものにする

④ 物理的な条件をつかむ

○子ども村の条件(施設の状態、周囲の危険箇所)を正確に把握し、参加者全員がつかんでおく

○自然条件への認識をもつ(気象条件、害虫の分布状況など)

○外部(他のキャンパーや不意の客)との関係に気を配る

⑤ 警備、避難

○危険な場所や、夜間の重点警備は、複数あにまで行う。

○避難の問題は、客観的かつ慎重に判断する。

○避難が決まったら、一糸乱れぬ集団の結集度が成功の決め手となる。

★健康を保証するために★

① 子どもの状態をつかむ

◇健康調査票等の事前の情報から

持病、病歴、血液型、基礎体温、アレルギー、生理の有無、

◇受け入れ時の保護者からの情報・自分で観察した子どもの様子

特に一週間前から当日までの健康状態

② 当日(毎日)の子どもの状態をつかみ、対策をたてる

・睡眠、食事、排泄の状態をつかむ T 快眠、快食、快便をこころがける

・疲労度、意欲度から状態をつかむ

③ 本部の準備

○救急箱・看護婦さん、子ども村本部病院・もよりの救急病院と医師の確認

★応急手当★

子ども村で予測されるケガ、症状への対応なので、頭に入れておくこと。

まず、ケガや症状、不測の事態に遭遇した場合は

① 周囲の安全を確認して二次災害を防ぐこと

(必要ならば子どもたちを静止させる・安全な場所に集まって座らせる。)

② ケガ人、病人の状況を冷静に観察すること

③ 必要な対策、処置をすばやく行うこと

・患者の苦痛を和らげる、ストレスを減らす(心のケア)

■応急処置は今以上悪くならないようにすること

☆傷と止血

○傷の種類

・非開放性の傷… 熱傷、凍傷、打撲傷、ねんざ

・開放性の傷 … 切り傷/出血が多く、縫うことも多い

さし傷/傷口は小さいが深くまで達していることがある。

感染症をおこしやすく、内臓損傷のおそれもある。

すり傷/皮膚をこすった傷で出血や痛みがある。

傷の範囲が広く、感染も起こしやすい

○傷の危険性

① 出血 ②細菌感染(化膿)③いたみ

○ 一般的注意

① 傷の手当てをするときは、必ず手を洗う。汚れた指、消毒しないもので傷に触れてはならない 傷の上で、話したり咳をしたりしてつばを飛ばさない

② 傷口にできたカサブタ(凝血)は、むやみに取り除かない。

③ 傷口に直接、綿やちり紙など繊維が残るものをのせない。

④ どんな傷でも安静にして、全身の状態をよくみて、保温や体位に注意する。

あわてて運搬しようと、手荒なあっかいをしてはいけない

⑤ 固定は、安静や止血にも効果がある。特に骨折や打撲を疑われる場合は固定が大切。

⑥ どのような部分でも包帯をまく実技をおぼえる。確実に巻けば、傷の安静、止血、固定にも効果。

★救急処置★

○出血が多い場合は、止血が先決。

○傷の処置

- ・熱傷:流水、ため水で冷やし、痛みを和らげる
- ・打撲傷:湿布等で痛みや腫れを和らげる
- ・ねんざ:固定し、湿布等で患部を安定させ痛みを和らげる
- ・切り傷:出血が多く、縫うことも多い。第一に止血。第二に消毒。第三に保護。
- ・さし傷:傷口が小さく深いため、表面が治癒しても奥に菌が残ってしまい、感染症をおこしやすいので、注意する。特に笹や竹、クイ、地面にあった釘。
- ・すり傷:皮膚の表面をこすった傷は、砂や泥や細菌がざらざらになった皮膚表面に付着していて、傷の範囲が広く、出血浸出液がおおく、夏場は感染しやすい。擦り傷はやわかいブラシまたはガーゼと流水で、洗い流すこと、いい加減に洗うと化膿し悪化する。
- ・泥沼での傷は、破傷風とガス壊痕の危険性があります。
一水道水などで傷の汚れを洗い落として、必ず医師の診察を受ける。

○止血

- 人間の全血液量(体重 kgx 約 80ml)○ 一時にその三分の一以上を失うと生命の危険。
- 大出血を伴う傷は直ちに止血しなければならない

☆止血の仕方

- 手足—その部分を高く上げる
- ① 直接圧迫止血(基本、確実) 傷の上から直接ガーゼやハンカチで強くおさえてしばらく圧迫。
- ② 間接圧迫止血 傷口より上方の動脈(止血点)を手や指で圧迫して血流をとめる。
- ③①+② =直接圧迫止血だけでとまらないとき、さらに間接圧迫止血を加えて行う。
- ④ 止血帯(手足の出血で、①でも②でも③でもだめなほどのひどい出血の場合)
三角布等で傷口より心臓よりの部位を縛る。縛った時間を部位の付近に必ず記録する。
縛ることで動脈が圧迫され、血流を泊める止血方法のため、決して安易に用いてはならない。また、時折止血帯をゆるめ、血流を促さないと止血したさきが壊死するので、嚴重注意。
※ ①~④の止血を行い、さらに医師によって完全な止血、手術、処置をうける

☆骨折の場合

- 解放性の骨折:折れた骨が皮膚を突き破って出ている
- 非解放性の骨折:骨が折れているが皮膚表面に損傷がない。

○骨折の処置

- 安静、固定し、病院へ。
- 変形するほど曲がっていても、その状態のまま固定する。なぜなら、手を加えることで周囲の組織の損傷を招きよけいな傷を作ってしまうため。
- 固定するためには、骨折部位の前後の関節を越えて添え木をし縛る。腕や指などは、棒や木の枝でも可能だが、足の場合は板体なら戸板等で固定する。

☆動物のかみ傷(主に犬、ネズミ、蛇)

- 動物の歯は不潔-特殊な病気だけでなく 一般の感染に注意
- 一般的救急処置
- ① どんなに小さい傷でも、石鹸を使って水でよく洗う。
傷の周りも唾液のついているところはよく洗い流す。
- ② 清潔なガーゼをあて、包帯をする。

③ かみ傷は化膿(うみ)しやすい。病気に感染していることもあるので、医師の手当てを受ける(犬の場合)

○症例: 鋭い歯—深いさし傷、裂き傷、子どもはかみ殺された例もある

狂犬病の発生は現在の日本ではない(○海外で感染の可能性はある)

猫、きつね、おおかみ、スカンクなどからも狂犬病は伝染する

○救急処置

- ① 化膿しやすい傷の処置と、かんだ犬の観察(大切)。
- ② すぐに、かみ傷の一般的救急処置(上記)を行う
- ③ 犬の特徴などを保健所に届け、捕獲してもらおう(2週間隔離して観察する)
- ④ 頭部以外のかみ傷ならば、人間の発病には40日かかる。(犬の状況を見て処置)
- ⑤ 犬にかまれた傷は化膿しやすい—必ず医師の手当てを受ける。

(蛇の場合)

○普段から無毒・有毒へびの見分け方を知っておくとよいが、とっさで区別がつかないことが多い

○症例: 日本の毒蛇は主にマムシとハブ—かまれると腫れと痛みが起こる

適切な処置をしないと全身状態が悪くなり、死亡する事故も起こる

○救急処置

- ① 安静にして、走ったりしない
- ② 手足—傷口より上部をしぼる。
- ③ なるべく早くナイフや剃刀の刃で、牙のあとを長さ1cmくらいに皮膚を切って毒を吸い出す。 ※切るものがなければ、しばって吸い出すだけでも続ける。(虫歯、口に傷のある人はだめ)
- ③ 医師の手当てを受け、血清注射を受ける。 ※ 毒蛇では、10分前後で傷口がはれてくる。 早く医師の手当てを受け、血清の注射を受ける必要がある。

☆じんましん

○かゆみ止め—その部分を冷やす

○寒冷じんましん(冷氣や冷水が原因) — 毛布でくるむか、風呂などで温める

☆日射病など(二種類の対応があるので、観察すること)

○脳のサーモスタットが体温が上がりつづけたことで故障

○日射病: 長時間炎天下にさらされていたり、直射日光かで重労働をしているときに起こる

○熱射病: 直射日光以外の高熱の環境下(機関室など)で重労働をしているときなどに起こる

○症状: 顔色—赤、皮膚—熱く乾いている、発汗—ない、体温・高い(41~42° C) 脈拍—早く大きい、頭痛、めまい、吐き気、時には意識不明もある。

○救急処置

- ① 涼しいところへ運び、衣類をゆるめ、水平位または上半身をやや高めに寝せる。
- ② 意識がないときには、気道確保の体位(下あごを受け口に)
- ③ 意識があり、嘔吐、けいれんなどがなければ、冷たい飲み物を飲ませる。
できればうすい食塩水(電解質の飲み物でも可)

- ④体温が高いときは、冷たい水で全身の皮膚を拭いたり、氷枕で頭を冷やしたりする。それでも熱が下がらないときは、体をシーツなどで覆い、上から冷や水をかけるか、水槽に患者を入れる場合もある

☆水や塩分が汗や尿となって失われておこる脱水性ショック

- 熱疲労：高熱の環境下、ことに蒸し暑いところで、汗をひどくかいて働いたり、風通しの悪いところで多人数が集まっているときなどに起こりやすい。
- 熱けいれん：熱疲労の経過中、一部の筋肉にけいれんを起こした場合
- 症状：顔色一白、皮膚-冷たくべとべと、発汗・多い、体温一平熱(手足はむしろ冷たい) 頭痛、めまい、吐き気、時には意識不明もある。
- 救急処置
 - ① 風通しのよいところに運び、水平位に寝かせる。
顔色がひどく蒼白のときは足の上がる体位に寝かせる。
 - ② 熱がなく、皮膚が冷たい場合、冷やさずに保温すべきである。
 - ③ 患者が欲しがれば水を、できればうすい食塩水を飲ませる。(電解質の飲み物でも可)
- 予防
 - ① 吸湿性、通気性のよい衣服を着用すること。
 - ② 水分の補給を適に行い、同時に塩分も少量補給しておくこと

☆こむらがえり

- 疲労や心因性の過呼吸(過喚気起症候群)が主役:子どもが声を出さずしゃくりあげて泣くときに起こりやすい。緊張して呼吸をしすぎて起こることもある。
- 筋肉の使いすぎ/水温の変化等/血液の循環不良:長い間冷たい川で泳いでいるとき。
- 救急処置
 - ① 足を伸ばして指をそらせる
 - ② 筋肉のマッサージと温湿布
 - ③ 過喚気起症候群の場合、紙袋再呼吸(ちょっと息を止めても可、泣いている子には、口元にタオルを持たせて酸素濃度を落としてやると良い。)
- 予防
 - 準備運動(ストレッチ)特に足を念入りに
 - 朝食抜き、昼食抜きは禁物
 - 子どもの様子をいつもよく観察していること。